

「命の重み」

愛川町立愛川中学校 3年天野 結菜

今、私達が生まれてこれたのはどうしてだろうか。ある日、家の本棚で日記を見つけた。その日記は「育児日記」。中を見てみると、そこには母が書いた、私の乳児期から幼児期にかけての頃の様子がびっしりと書かれていた。私がまだ生まれる前のエコー写真と妊娠中の日記も書かれていた。その日記を読んでいたら、ふと頭に少し前の記憶が蘇ってきた。いつか母に言われた言葉。「あなたは他の子と違って、たくさん時間をかけて苦労して産んだ子なんだよ。」と。

私は今まで命の重みについて真剣に考えることはあまり無かった、この世界に生まれてきたのは当たり前のようなものだと思っていた。最近、虐待や殺人に関するニュースをよく見かけるようになった。まだ生まれて間もない乳児や小さい子供が、親の虐待によって亡くなってしまおうという悲しくて残酷なニュース。また、自分と歳の近い子が、いじめが原因で自殺してしまうという報道を目にする。そんな時、命の大切さを感じさせられる話を母から聞いた。

私の両親は、子供ができにくい体で、自然妊娠は難しいと言っていた。約十八年前、両親は私を産むために、約三年半の間、病院に通い続けた。そこで、両親は不妊治療という治療を始めた。中でも最終手段である「顕微鏡受精」という技術的に一番高度な手術をしたそう。今では不妊治療は保険が適用されるが、当時はまだ保険が適用されなかった。一回の治療だけで数十万かかったと聞いたときには驚いた。経済的な負担だけでなく、体力的にも負担がかかる。この治療をするにあたって、様々な種類の薬を飲み、副作用と闘う。余程強い気持ちがないと挫折することもある。また、その治療をしたら必ず妊娠できるわけではなく、一回平均二十パーセントから三十パーセントの確率と言われている。一度妊娠しなければ体を一、二ヶ月休ませる必要がある。まるでギャンブルのようなものだった。両親は一回の治療では成功できなかった。それでも諦めず、何度も治療を繰り返したそう。そして二〇〇七年の夏、「私」という命を授かった。

この話を聞いたら自然と涙を流していた。長い間苦労し、私をこの世に迎えてくれたことに感謝と嬉しさで胸がいっぱいになった。私が生まれてからも、一つひとつの成長を喜んでくれていて、両親の愛情をたくさん感じて育ってきた。きっと、どの家庭もそうなのかもしれないが、それが当たり前でない家庭が現実ではたくさんある。

虐待や殺人の報道を耳にすると、どうしてそう簡単に命を奪ってしまうのだろうと思う。世の中には私の両親のように、授かりたくても簡単に授かることのできない人たちが約六組に一組の割合にいるといわれているからだ。それなのにこうした残念なニュースを聞く度、この人たちの気持ちも分かって欲しいのと思う。この世からいじめや、虐待、差別な

どの人権問題がなくなるというのは簡単なことではないと思う。だからといって許されるわけでもない。親から授かった命を自ら絶ったり、自分の手で殺人を犯すということを絶対にして欲しくない。それに、この先長い人生がある子供の命を奪って欲しくない。子供は親を必要としているのに、そうやって傷つけて良いのか。些細なことがたった一つの命を簡単に奪う。こんなことがあって良いのだろうか、自殺、殺人は良くないと口では簡単に言えるが、そうになってしまう原因を作らないことが大切だ。いじめでは、いじめている人、いじめられている人を見てもぬふりをせず、お互いを大切にしよう。さらに相談する人が一人でもいるだけで、命が奪われる原因は少なくなると思う。こうして、一つでも多くの尊い命が救われ、悲しいニュースを耳にすることがなくなってほしい。

私になにかできることがあるかと言っても、この社会を変えるような大きなことはできないだろう。見て見ぬふりをせず、多くの人に寄り添って話をする。私ができることは、こんな小さいことだ。けれど、こんな小さなことでも救われる命があるのなら、私はたくさんの人に寄り添っていきたい。そして、私を産んでくれて育ててくれた両親、今まで支えてくれた人、たった一つの命に感謝の気持ちを忘れずに生きていきたい。

生まれてきた人みんなが平等に愛され、平和に過ごす権利があるから。

「優しい声かけができる 世界へ」

愛川町立 愛川中学校 3年 田中 向日葵

なんだか近寄りがたい、そんな感覚があった。二〇一九年、世界で初めて新型コロナウイルス感染者が確認された。その頃はまだ他人事だと思っていたが、段々と感染が広がって、コロナという脅威が近づいてきた。最初に学校でコロナ感染者が確認されたのは、まだ小学校六年生くらいのもので、コロナという得体のしれない見えないウイルスに恐怖を覚えた。絶対に感染したくない、そんな思いが強かった。

そんな時、先生から話をされた。感染した人は、しっかりと自宅療養をして他の人に感染させないことを確認して来ている。一度感染したという理由だけで差別やいじめをしてはいけない、私の考えが間違っていることを気付かされた、言われてみればそうだ。感染した人はしっかりと他の人にうつさないように学校を休んでまで自宅療養をしていたのに何もコロナについて知らない私が得体のしれない目の前のウイルスに不安をいだき、感染したくないという思いが近寄りがたいという感覚になってしまったんだと当時を振り返ると思う。新型コロナウイルスに感染するより怖いことは感染した時の差別と偏見だ、感染した人は悪くなくとも、コロナに感染したという事実が差別や偏見を生んでしまう。

コロナによる差別は世間でも大きな話題となった。五類相当に引き下げられた今では考えにくいことだが、咳をしただけで感染者扱いをしたり、医療従事者とその家族が差別されたり、感染者が多いという理由だけでアジア人が差別されるといった様々な人権問題が生まれた。本来絶対あってはならないことだが、感染症によって差別や偏見が広がってしまった現状があった。コロナが流行し始めた頃、正しい知識がなく、得体のしれないウイルスに人々は不安を抱いた結果、感染した人を差別したのだと思う。でもそれは間違っている。感染した人が一番怖いものだから、正しい知識を身に付けて、寄り添っていくべきだ。

過去にも感染症による人権侵害があったと聞いたことがある。代表的な例としてはハンセン病だ。昔から治らないとされていたこの病気は、病気が進行することで顔や手、足などが変形することがあり、差別の対象となっていたそうだ。ハンセン病に感染してしまった人は遠く離れた島々、施設に追いやられ、隔離された、療養施設でもまともな医療が受けられず、強制的な園芸作業や厳しい外出制限があったそうだ。本来、一人一人に平等に与えられるべき自由が奪われてしまったのである。感染した人はなにも悪いことをしていないのに、感染したという事実が差別や偏見を生み、その人たちを苦しめた。現代では、ハンセン病は治る感染症とされ、今まで隔離され差別や偏見に苦しめられてきた人たちには国家賠償金が支払われたそうだ。

私は意外と感染症による人権侵害が身近にあることに驚いた。過去にも現代にも感染症による差別や偏見があり、多くの感染者が苦しめられてきた。感染した本人たちは何もしてい

ないのに、感染したという理由だけで差別や偏見をされるのは理不尽だと思う。感染する可能性は誰にでもあるはずだ。もし、自分が感染して差別を受けたらどう思うだろうか。今まで仲の良かった人が感染を理由に差別してきたらどう思うだろうか。きっと悲しいと思う。怒りを覚える人もいるかも知れない。私は、感染症による差別や偏見がなくなることを願っている。感染するかもしれないという恐怖は誰にでもあると思う。その恐怖を差別や偏見に繋げないでほしい。私は誰でも一人一人の人が平等に自分らしく生きられる世界になってほしい。感染症によって人権が脅かされてはならない。相手を思いやり、優しい声かけをしてほしい。

もし、感染した人が治って、戻ってきたなら、「待っていたよ。」そう声をかけられる優しい世界になることを願っている。